

イエスと律法学者の間で交わされた会話で問題になったのは2つの問いです。まず第一に「何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるのか」という問いです。2つ目の問いは「私の隣人とはだれのことか」と言う問いです。永遠の命を受け継ぐというのは、何を行えば救われるのかという問いのことです。ルカ福音書には同じ問いをイエスに発した金持ちの議員の話が18章18節以下に出てきます。イエスが「善いサマリア人の譬え」を話す前の律法学者の問いでも、18章の金持ちの議員の問いでも、「何を信じれば」救われるのかという問いではなく、「何をすれば」救われるのかと問うています。

現在、月1回の聖書研究祈祷会ではガラテヤの信徒への手紙を連続で学んでいます。著者であるパウロは、信仰における基本的な姿勢として大切な「信仰義認」をガラテヤ書の中で展開しています。信仰義認と言うのは、信仰という行為が、律法主義のように一種の功績となって、それによって義とされるというものではありません。信仰義認における「信じる信仰」というのは、イエス・キリストにおいて啓示された神の愛（＝罪人でしかあり得ない人間を招き、赦し、神の子として神との義しい関係に受け入れてくださる神の愛）を受け入れること以外にはないということです。ですから、行いによって自らを堅く保とうとして、差し出されている神の恵みと憐れみに心を開き、身を委ねようとしないうことこそが罪だという立場のことです。ですから、行いがなくてもただ信じるだけでいいんだという信仰スタイルのことではありません。

信じるだけで行いがなくてもいいのだと言うのは、パウロのいう信仰義認ではないのです。イエス・キリストにおいて啓示された神の愛を信じる信仰に自らを委ねたならば、その神の愛に応えるかたちで日常生活の行動が整えられていくのです。ですから、信仰の結果として、善い行いというものが完成されるのです。

8月6日は広島に原爆が落とされた日です。いまだに、原爆によって戦争が終わることになったのだというように理解しているアメリカ人が多いのですが、原爆投下はアメリカによる人体実験だと私は受け止めています。それを証明するように、アメリカ軍の駐留の一番初めに、医療チームが広島と長崎に入って原爆の被害について調査しています。朝日新聞の8月3日付に「絶たれた明日／被爆78年」の第3回目に登場した増田修三さんの人生が紹介されていました。原爆で数千人の子どもが孤児になりました。疎開していた子どもたちが親や親族を原爆で失い、家庭を失ったのです。

広島に原爆が投下された時、長崎の五島列島の陸軍にいた僧侶の山下義信（ぎしん）さんは、広島に妻と6人の子どもがいました。原爆で13歳の次男をなくしたので、1945年9月に復員すると、焼け野原で目にしたのは劣悪な環境で暮らす孤児たちの姿でした。兄は差し置いても親を与え、家庭を与えるのが急務と考え、県知事に掛け合っ、土地と建物を借り、父や自分の家も売り払って資金を作り、12月に「広島戦災児育成所」を開きます。まず受け入れたのは、原爆で家族を失った児童80人余りだった。髪が抜け、下痢が続く子どもたち。親恋しさと空腹で泣き止まない子どもたちの栄養と健康に気を配ったそうです。ある日のこと。「お母さんに会いたい」一人の男の子が空を眺めながら泣き出した。大工の父親は早くに病死し、髪結いの母親と妹は原爆で亡くなった、遺骨はみつからずじまいだった。その男の子は山下さんに尋ねた。「どうしたらお母さんに会えますか」。山下さんは答えずに窮し、押し黙った。男の子が続ける。「お坊さんになったら、お母さんに会える？」。山下さんはこらえきれずに、「会えるよ」¹

と答えたそうです。「お坊さんにしてください」男の子は当時10歳だった増田修三さん。年長の少年4人も続き、5人は山下さんと抱き合って泣いた祖です。

そして1946年11月。京都の西本願寺で得度し、少年僧5人が生まれました。増田さんは勉学に励み、京都の竜谷大学に入学します。大学3年生の時の手記に次のような言葉が書かれていました。「両親の恋しさに合掌していたはずのわたしの祈りが、いつかすべての人間の幸せのための祈りに変わっていることを意識できるのはうれしいと思う」。この言葉には、信仰心が成熟していく過程で、信仰心が自分の救いだけでない広がりを持つに至ったことがわかるものです。

大学を卒業すると、福井市の寺の長女・秀子さんと結婚して婿養子となり、朝倉義脩(ぎしゅう)となった。被爆40年を控えた1985年に広島市の平和公園内にある原爆供養塔での法要の導師をした際に、「お父さん、お母さんにやつと会えたような気がするよ」と話したそうです。1998年に朝倉義脩さんは62歳で生涯を閉じたのですが、息子の朝倉顕修(けんしゅう)さんによると、生前、原爆については何も語らなかつたそうです。40年ほど前に父親を車で迎えに行くと、泣きながら車に乗り込んできたので、聞くと広島にゆかりのある同世代の人と飲みながら話をしたと言う。けれども、誰が何を語り合ったのか、話そうとしなかつたそうです。それだけ自分の中で書かテイル苦しみや悲しみが大きかつたのです。

「母に会いたい」という思いから仏の道に進み、生涯を全うした朝倉義脩さんが、その仏の道でたどり着いた祈りが、人類すべての幸せのために祈る者へと変えられていった姿はパウロの信仰義認と重なり合う気がします。善いサマリア人の譬えは有名な譬えですから、詳しい説明は省きますが、「何をしたら永遠の命を受け継ぐことができますか」という問いには、どうしたら、自分も含めて我々人間の救いが達成できるのかという根本的な思いがあります。自分が救われることを求めて信仰の世界に入った者に、普遍的な救済が示されることが朝倉義脩さんの事例は教えてくれています。サマリア人の譬えに登場するサマリア人は人類愛の理想のような行動をとっていますが、それがどのような信仰の結果として生まれてきたものなのかを考えてみたい。

「あなたの隣人とは誰のことですか」という問いがイエスによって提出されたのですが、善いサマリア人の譬えに登場するサマリア人の行動を紹介したイエスは「誰が追いはぎに襲われた人の隣人になつたか」と問うています。基準が自分ではないのです。

朝日新聞の1面の「折々のうた」で、ある書店員が自宅マンションに帰って来た時、ホームレス風の人がいたので関わらないように自宅に入った後、なぜ水一杯でもあげることができなかつたのだらうと落ち込んだことが紹介されていました。私たちは、自分が誰の隣人になることができるのかを考えてみることから始めなければ、「私の隣人とは誰なのか」という自己を中心とした思考の枠組みからいつまでも脱却できないままなのではないでしょうか。

イエスは自分が罪人とはばかり付き合っているのを不快に思った律法学者やファリサイ派の人たちの攻撃にあいましたが、その行動を何か言い訳をして退けるようなことはしていません。アメリカのキリスト教会では自分の社会的立場が上がっていくと、属する教派が異なっていく傾向があります。バプテスト派の人はメソジスト派に、さらには聖公会へと変わっていくのです。このようなことは、自分の属する社会層が上へあがっていくたびに起こる傾向があります。私たちは自分の隣人とは誰のことかという思考スタイルではなく、神が出会わせてくれた人の隣人に自分になつているのかどうかという²視点で隣人愛を受け止めていかなければならないのではないのでしょうか。